吉田松陰東北遊歷と其亡命考察

諸根樟一著

地元の碩学が模索した
未開拓分野
初版以来六十三年、
初の復刻。

〈限定三五〇部〉

マツノ書店

ら父兄や兒玉、小田村等へ送つた手紙と云ひ、特に復二來原良藏一書、東征稿と云ひ、彼れのさうした擧動を深く詮穿すると、東北遊歷そのもの丶完了を以て、殉國的用猛の第一回と稱したのでなく、父祖代々最恩義ある藩律を犯した非行爲を代辯するものと言つてよからう。蓋し其の罪は縱し五郎へ自ら進んで應援する爲め、急變した一時的青年の感激行動と見做したいが、彼れにしては苟しくも武士たるもの、一旦の約束を撤廢するのは切腹以上の責任あるのみならず、後にも述べる事であるが、一行の義擧を東北の中から實現して、世人の覺醒に資する、新思潮への影響を絶對に信じたからであらう。換言すれば本來の目的たる東北視察は時局と重要の關係あるのを充分に知りながら、五郎の同行參加に因つて、屑よく之と替へるに、後者の方を以て精神的に、大なる效果があるものと信じたからであらう。

而已ならず松陰の詩や書狀中には、五郎を義援することを、宛も天下に告白するやうな檄語が可成り見られよう。例へば既に引いた答である「丈夫の一諾、苟にもすべからざるなり、夫れ大丈夫は、誠に一諾を惜む」の如き、或は「一諾忽せにすべからず、流落何んぞ辭するに足らんや」、若しくは「縱ひ一時の負ひを爲すとも、報國苟爲すに堪ふ」の類、悉く五郎の行動を絶對に信じて投じた應援誓約の表明に外ならない。殊に松陰は一段と之を强調して「太平の久しき、氣義の將に地に墮ちんとす、讀書の人に非るよりは、眞に之を知る能はず、氣義の事は天下萬世へ關係し、至大至重、窮達、禍福、榮辱、利鈍は一身、一家の事」の如き、彼れは斯の亡命の一擧を目して、徒らに五郎それ個人の復仇應援とは意識してゐないのである。彼れの應援その超越こそ「國家への御奉公、人に對して愧申さず」云々と披瀝して、決して一私人の至小至大の加勢とは念頭に無かつたのである。畢竟幕末の外夷難局に方り、斯の一擧を以て久しく太平に狎れ、忘れかけた義氣の復興と恢復を促す策と爲し、一介の五郎の境遇を執へて、兵學者的に之をして利大化し、自分の東北遊歷と相結んで、索莫たる關外からその切求する義氣、節義を發揚する思想的計劃を獲やうとするに至つたのであらう。縱し單なる一片の義氣であつても、社會に及ぼす影響の大なるは古今同一で、必ずしも之は漂々浪々たる五郎だけの應援に止まらぬと信じた行動でなからうか。そして其處に考察を假借されるならば、亡命罪と五郎報復後に於ての驛塵罪とに因つて、若し江戸に歸れず、長州にも戻られなかつた場合、更に蝦夷、樺太、黑龍江、滿洲を經歷して國家、國防上に偉大なる活動の目論見を抱いたかも知れぬ。彼れが日記の序文や、去年八月二十三日叔父に贈つた手紙に見ゆる林子平が海國兵談を著梓する苦心などにも、彼れのさうした遠大の理想を、既に之と關聯せしめ湧出してゐたかも知れぬ。友義の士來原良藏の正月十五日狀未に「復た會期無し、之が爲め惻然」云々と新三郎か誰かに言つてをるのを見ると、松陰は生きて再び良藏等に逢ふことを豫期しなかつたのである

内容見本
(75%縮小)

まいか。亡邸詩句中の「流落何んぞ辭するに足らんや」とは、正さしく之が隻對の意志でなかつたらうか。

前に戻るが、日記二十七日條の下文は「作二一詩一示之云、白水關下風蕭々、與君永訣在明朝、壯士策定休二遲疑一、勝敗天數非二人爲一、（下略）」とて、松陰が之を賦して五郎に與へた。去る二十三日一行が始めてミチノク勿來關外に入り、其の址下を通行中、五郎が口占した彼の「風雨蕭々日將夕ならんとす、來り宿す勿來關下の驛、君と手を分つ多日なからん」云々に、松陰が對へて「君に追隨して幾晨夕、踏盡す山亭又水驛」云々とは双絶の訣別詩であるまいか。況しても古來東北の界標と戒嚴の爲に設置した白河、菊多剗の要地に於てをやである。翌日の「二十八日、晴、斷然與二彌八一訣、午前發レ驛、初約與二彌八一訣、於此已久矣、及レ則情事難裁、買レ醉遣レ悶、所二以致一延留數日一也、出レ驛越二小坂一行少許、道左有二一路一、是爲二會津道一、余與二宮部一將レ抵二會津一、取二道于此一、而彌八則直行矣、宮部痛哭、呼二五藏五藏一數聲、余亦嗚咽不レ能レ言、五藏不レ顧而去、注視久レ之、及レ不レ得レ見而去」は、今の矢吹町外れあたりに至つて、一篇の劇的悲壯の情景で別れることになり、乃で五郎は仙道を北に直行し、松陰等は晉藩郡飯豐村に向ひ、夜は勢至堂村に泊つた。けれど尙「與二彌八一訣之後、終日茫々如レ有レ所レ失矣」と、二十八日條末に見られ、全く熟烈を越えた失意的の心境である。今此處に想察して言ふ失意とは、松陰がどこまでも五郎と生死を俱にして、彼れの報仇を達成せしむる覺悟を以てしたが、何故か五郎は徒らに二人をして加擔さすべからざるを識つて、固く之を辭した爲め、彼等は是非なく爾後の應援は中止し、最初の目的なる東北遊歷そのものに還つた事に歸著する。然し初定の如く三人で其の盛岡藩の奸賊を斬つたとて、果して松陰と鼎藏は自己の精神に生くるとも、又先方より害さるゝか、重罪に問はるゝかの二途あるに終り、單なる地方的噂位に止まる程度でなからうか。從つて其の壯烈なる彼等の行動を以て必ずしも關外奥州より忠孝、節義の復興を天下國家に示し、士道上に重大なる影響を與へるに至るか什うかは請合はれなからう。要するに松陰等の五郎援援は全く多感、多血の純眞さを遺憾なく發揮し、東北遊歷をして自ら悲壯化せしむべく、好んで五郎への應援を固持したのであると、姑らく假定するに止めて置きたい。斯の言分は史論的に甚だ興味の遊辭であるけれど、東征稿以下に假令僞らず執筆してゐても、松陰の全生涯を通じ、若し精神分析學的に之を考察し批判すれば、江戸邸脫走は當に五郎と出發日の約束を履行する爲めに過ぎず、且彼れの性格として終始武士を以て任じ、其の爲め五郎との關係が書翰と日記に、徹頭徹尾さう出來て了つたのでなからうか。

二十九日、宿を立ち仙會の界領なる勢至堂峠を越え、豫定の若松に入つた。新太郎から紹介

内容見本
（原寸大）

東北遊日記と相俟つて、其の全璧に精力を費した好對なのは、明年大和の節齋塾で作した五郎義援の顚末なる「東征日記」である。後者は右と別趣、關聯の日記でもあり、又江幡の人物傳で、恰も藤田東湖の著はせる下斗米將眞傳を凌がんとする程の努力を傾注したかも知れぬ。下斗米と五郎は同藩の由緣りもあり、曾て水戸滯在中松陰は其の傳を江幡から寫跋したのを贈られてをるなどにも、さうした激勵が自然と湧いてゐたからである。「文章報國」「文は人なり」てふ明治の流行辭語は、强ち新文藝的運動の標語でなく、夙に幕末の志士に克く觀念された例で首肯されよう。況して松陰の如き其の實文章には常に最大の注意と精力を用ひし、例へば後年松陰が東送の永訣に臨み、友人土屋に示して「〇前略、清人云、拾二收人遺編、斷簡一、其功德更倍二于瘞二埋暴骨、露骸一、今吾骨未レ知二何所暴露一、而公先錄二存吾文一、吾雖レ死二於道路一可也、〇東行前日記所收、萩松陰神社藏、」かう遺言してをるなどにも、最後まで悲壯な文章意識を心得てゐたのに、覺とるべきであらう。

翌日の朝は晴であつたが、卽て雪に變はり、愈東北特有の惡天候となつた。三人は植田を發足、海道から離れ、此處より左に折れて仙道に出拔ける山間の道を取り、山田、根岸村を經、齋所の有名な難嶮を突破し、其の夜は白川郡竹貫村に泊り、二十五日又雪を衝いて、仙道南要の白河に至つた。そして其の翌日例の如く新太郎の紹介狀を以て、劍士三田大六を訪問したが目に一丁字無き人物であるのに呆れた。然し旅宿に越後流兵家平井勘五郎、靑木造右衞門、山田喜內の來訪を受けたが、彼等にも亦得べき所がないのに失望した。此の日の條末に「岩城海濱、距二白川二十里、有レ變白川差レ兵援レ之、白川雖レ在二亂一山中一、東山本道、而西通二肥之長崎一、東極二松前、蝦夷一、奧羽諸侯必由之地、市廛繁盛、」と書止めてをる。固より松陰等は水戸や會津とは違ひ、白河に滯在して其の藩の政情や士風、乃至城下の狀態を詳しく視察しやうとした日程を豫定しなかつた。それなのに二十八日まで當地に足を駐めたのは奈何。今之を松陰の日記で言ふと「廿七日、晴、尙滯、彌八將レ有レ所レ爲焉、故欲下以二明日一訣上、事甚秘、不レ可レ紀、」とある斯の最後の意は、東征稿の前日條に「聞賊〇五郎亡兄ノ仇田鑛左膳、以二四日一皈レ國〇盛岡、機不レ可レ失也、請與二二君一永訣、吾二人〇松陰、鼎藏、請二生死從一之、五藏强辭レ之、遂定レ策、」に瞭然であらう。而して東征稿の云ふ所、若しか靑年的誇張でなかつたれば、江幡が蹶然策の定まつたのに對して、松陰等の『生死之に從はんことを謂ふ』とは、尠くとも自身が東北に亡命する動機の決心と依然重要の關聯を言つてをる。爾り彼等は五郎に應援、達志しむる事が社會の爲め重大の意義があると、强く信じたのは何んとしても否定を容れる餘地のなきまで、斷言してよい論定に陷いらざるを得ない。

曩に松陰が江戸より遣つた家兄宛の舊臘十二日狀、十四日亡邸一別の詩、翌春十八日水戸か

「吉田松陰東北遊歴と其亡命考察」を推薦する

京都大学名誉教授
前京都学園大学学長
海原　徹

吉田松陰は、安政六（一八五九）年一〇月二七日、江戸伝馬町獄内の刑場で死んだが、このとき彼は、まだ数え年三〇歳の若者であった。このいかにも短い、ほとんど駆け足の生涯の間に、彼は驚くほど精力的に日本各地を旅している。藩外への旅は、嘉永三（一八五〇）年秋の九州遊歴に始まり、嘉永七年三月、下田踏海の失敗による下獄まで、僅か五年間に計六回試みられている。なかんずく嘉永四年末から翌年四月まで、厳冬の風雪を冒して企てられた四カ月余に及ぶ東北旅行は、交通手段の著しく貧弱な江戸時代にしては、ほとんど信じ難いほどの快挙であるが、のみならず、この旅行は、過書（通行手形）を持たずに出発した脱藩行であり、帰国後その罪を問われて士籍削除となった。当然のことながら、藩校明倫館兵学教授の地位もこのとき失っている。吉田家断絶、浪人となることも一向に厭わない、封建時代のサムライ身分にとっては破天荒の行動に若い松陰を駆り立てたものは一体何か、東北旅行の目的や意義、あるいはその成果について、早くから多くの人びとが関心を持ち、さまざまな角度からその謎を解き明かそうとしてきた。

本書もそうしたものの一つであり、東北遊歴を主要なテーマにしながら、松陰の旅日記をすべて網羅的に取り上げ、その足跡を忠実に辿る作業を通じて、なぜ彼がそのように旅に執着したのか、また彼は、そうした旅の繰り返しの中で一体何を見てとり、何を経験したのか。旅から彼が学んだもの、それが彼の人格形成にいかなる影響を及ぼし、その後の主張や行動にどのように反映されたのかを考えようとしたものである。

先行研究の代表例は、昭和一六（一九四一）年八月刊の妻木忠太『吉田松陰の遊歴』であり、文献史料を検索しながら、可能なかぎり「松陰踏践の各地を精査し参照之為に現今の市町村名を附記した」という手法は、本書もまた踏襲しているが、前書との違いは、著者の諸根樟一が東北出身の郷土史家であり、自らが生まれ育ったこの地方に関する豊富な知識や情報を有していたという点である。「凡例」の冒頭でいうように、もともと本書は、東北への第一歩となったいわき市植田町に計画された記念碑建立とセットになったものであり、松陰ら一行が泊ったと推定される旧植田宿の本陣や側本陣中根一族について詳細に検証するなど、極めて興味深い論考が随所に見られる。勿来の関を越える前日に泊った磯原（北茨城市）の野口本分家の三軒について取り上げ、「日記」に登場する野口源七を玄主の誤記だとしたのも、家系図などを参照した説得力に富む指摘である。

よく知られているように、東北旅行には、宮部鼎蔵と江幡五郎の二人の同行者がいた。池田屋事件で死んだ熊本藩士宮部は有名人であるが、亡兄の敵討を果たせないまま、維新後まで生き延びた江幡は、意図的に歴史の表舞台から抹殺され、行方不明者のような取り扱いを受けてきた。これに対し本書は「南部叢書」のような新史料を織り混ぜながら、彼を取り巻く交友関係をさまざまな角度から掘り起こし、その人物像を可能なかぎり明らかにしようとした。「諸文に見はれたる江幡関係残篇」中の「東上日記」のように、従前の研究書で部分的に紹介されたものを全文収録したものもあり、いずれも極めて史料的価値が高い。「全集」そ

の他に収録されている日記、詩文、墓碑銘などを改めて再検証し、一つ一つに新しい解題や校注を付したのも大いに評価できる。ただ、著者自身は、江幡の後半生にあからさまな嫌悪感を示し、「不烈、不義なる者」「日蔭者の武士、似而非儒者」などと罵倒して止まない。草莽の志を終生捨てず、刑場の露と消えた松陰の生きざまと比較したもののようであるが、戦時下の思想界を吹き荒れた「敢然起て国事に身を投ぜんとする」「殉国運動」に松陰の死を重ね合わせたことは、おそらく間違いない。

過去形となった右翼用語や「支那」のような差別的言辞が散見されるのも、時代情況のゆえであるが、これらは必ずしも本書の値打ちを減殺するものではない。そうではなく、本書が発掘した新史料は多種多様であり、またそれをベースにした独自の論考には、しばしば心を動かされ耳を傾けるものが少なくない。用紙の供給がなく、僅か三〇〇部しか印刷されなかったため、完本を見る機会がほとんどないのも、本書の値打ちを押し上げるのに役立っている。いずれも、早くから本書の復刻が期待されていたゆえんである。

なお、著者の諸根樟一は、明治二六（一八九三）年に福島県石城郡川部村（現いわき市川部町）に生まれた。古書店を経営する傍ら、福島県などの地方史研究家として知られ、『磐城文化史』『福島県政治史』上巻など多くの著作がある。

東北人が描いた松陰と江幡五郎

作家　山田兵庫

東北地方へ行き「長州（山口県）出身です」と言った途端、相手の態度が一変したといった話を、よく聞く。マスコミが興味本位に煽り立て過ぎるきらいもあるが、いまなお戊辰戦争で「敗者」となった東北各地には、薩長に対する怨嗟の声が渦巻いているのだ。

だが、長州の精神的支柱ともいうべき「吉田松陰」の存在は、東北でも別格らしい。青森ではいまも、松陰の顕彰活動が行われていると聞く。あるいは私は以前、会津若松の郷土史家から、自身が所蔵する松陰の書簡二通を見せてもらったことがある。それは家に伝わったのではなく、大枚を払い購入したものという。

松陰は「長州」という枠を越え、評価される人物なのだ。時代と切り結び、奮闘したその生きざまは、普遍的な魅力を放つのだろう。特に、朴訥で生真面目な傾向が強いとされる東北人と、不器用なまでに「至誠」を貫いた松陰とは、何かと共通点が多い気がする。

『吉田松陰東北遊歴と其亡命考察』（以下本書とする）は、福島県植田町（現在のいわき市）に昭和十九年（一九四四）、松陰の足跡を示す石碑が建立された際の記念出版だ。

著者の諸根樟一は東北の郷土史家。地の利を存分に利用し、松陰の東北遊歴のひとつ、ひとつを丹念に検証してゆく。そしてこの苦しい旅の経験が、その後の松陰の人間形成に大きく影響を及ぼしたとする。同時期、時局に迎合して量産された、凡百の松陰伝とは明らかに一線を画す労作である。

以前、古書店で本書を入手した私は、その緻密な調査に息を呑んだのはもちろんだが、同行者のひとりである江幡五郎についての記述が気になった。「悉く不烈を告げて、旧友を憤慨、呆然たらしめるに終わった」など、著者があからさまな嫌悪感を剥き出しにしているからだ。

江幡は兄の仇討ちを目的としていたが結局果たせず、生きて明治の世を迎える。そして那珂通高（梧楼）として、木戸孝允の推薦で大蔵省や文部省に出仕し、明治十二年、五十三歳の生涯を閉じた。こうした後半生が著者の目には、俗っぽく映ったようである。たしかに東京青山にそびえる、人の背丈以上もある「梧楼那珂先生之墓」を見ても、ある種の毒々しさを感じなくはない。

江幡は盛岡藩士、すなわち著者と同じ東北人だ。にもかかわらずこのように扱ったのは、意外といえば意外である。郷土史家や郷土作家というのは、同郷人という理由だけで我田引水、贔屓の引き倒しで強引に祭り上げてしまう場合が多い。江幡の評価が妥当か否かは別としても、安易な「郷土愛」に裏打された著作ではないことは分かる。そして著者の心情が、著しく松陰に傾いていたことも理解出来る。

ただ、私などはむしろ本書によって、歴史からドロップアウトした江幡の生き方にも興味を覚えた。その後、著者も知らなかったであろう江幡の史料が目に止まったので、参考までに紹介しておく。

戊辰戦争で盛岡藩が朝廷に抗した責を問われた江幡は、東京芝の金地院で謹慎させられた。その際の日記が『幽囚日録』の題で、平成元年に国書刊行会（岩手古文書会編）から出版されている。

この中に、失意の江幡が、松陰らとの東北行に思いを馳せる一節がある。明治二年七月十一日の条、「吉田松陰が東北遊日記もて来て見せられぬ。吾と宮部鼎三と常奥ニ遊べる紀行也。其内ニハ吾忘れたる詩なども載たるニ懐旧の涙せきあへずぞありける」の部分だ。

本書でも述べられているが、松陰の『東北遊日記』は前年七月、大阪・京都の三書肆が共同して板行していた。江幡はそうした刊本を、出入りの貸本屋から見せられたのだろう。そして、その中に十七年前の友や自分の姿を確認し、涙したのだ。

それは歴史の中で永遠に輝き続ける者と、現実の世界を生きねばならぬ者とが、はっきりと別れてゆく瞬間だったのかも知れない。

目次

自序（東北遊日記の日数、天候、国別、藩邑、里程、宿毛）
一　平戸遊学の帰途熊本に宮部鼎蔵と相識る
二　江戸遊学間鼎蔵と相房海岸を巡視す
三　東部学会の失望、東北遊歴願認可
四　江幡五郎の参加と江戸送別の前後
五　亡命に変じて水戸に至り二人の追躡と会同
六　勿来故関阯を越え始めて陸奥に入る
七　劇的報仇奔走中の邂逅、遊歴完了、帰江
八　自首、帰国、屏居待罪、裁決（用孟第一回挙）
九　東征日記の執筆、殉国者の絶対信念
十　松陰の日記及紀伝　①松陰「東北遊日記」②松陰「東征日記」③宮部鼎蔵「東北旅行日記」
諸文に見られたる江幡関係残篇　①五郎の東上日記②書状、日記、詩文、墓碑銘抄録
松陰、二十一回孟士命名動機と其殉国的精神表徴
関係記事補遺　①諸書抜粋　②東北に携帯の「雑録」抄
追補　①東北遊日記の初版本に三種あり　②松陰一行の植田宿泊は当時の本陣又は其下宿に定むべし

■体　裁　A5判貼箱入　四七六頁
■特　価　一万円（税込・〒500円）（特価締切二月十日・定価一万五千円）
■発　売　平成十九年一月十日
限定三五〇部（番号入）
▼刊行と同時PRにつき売切の節はお許し下さい
▼書店不卸　▼分割払可　▼返本OK
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店